

日本中世住宅を構成する建具・家具・道具とその流通に関する対外交渉史的研究

研究代表者 野村俊一（東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻）

調査参加者 西松秀記（長野県庁）

日本中世の住宅・寺院にみる建具・家具・道具とその情報は、東アジアのなかで各々どのように流通したものであったのか。本研究はこの問いを解くための基礎研究の一つとして、絵画史料に建具がどのように描かれているのかについて網羅的に検討し、まとめたものである。

建具・家具・道具に関する研究は特別に新しいものではない。しかし、これらがいかに各々「流通」したのかという視点を導入することで、全く新しい建築史学の可能性を切り開くことが出来る。というのも、建築「全体」の実態が、いかに「部分」別に陸と海を越え、遠隔地へと伝達したのかという大きな問いを解くことに繋がるからである。

建築は巨大ゆえに携帯できない。ここに、建築というジャンルの大きな特殊性のひとつがある。この特殊性のため、建築の実態を遠隔地へ伝達するには、文字・絵図・模型などで表象したり、空間や造営の体験からその様相や技術を内面化したりすることで、実態を情報として扱わなければならない。あるいは、全体を部分に解体することで、移築・運搬しなければならない。その可搬性を獲得できる単位の一つに建具が挙げられるのであり、とくに海を越えて建築を伝達する場合や、東アジアで多く造営された木造建築を伝達する場合は、この現象が顕著にあらわれるのである。

建築の全体がいかに部分に還元され、伝達されたのか。この問いを考察するための資料の一つとして本研究では、日本で制作された絵巻物（『日本絵巻大成』・『続日本絵巻大成』（ともに中央公論社）所収のもの）と主要中国絵画（『中国絵画全集』（浙江人民美術出版社）所収のもの）を用いて、どのような建具が、どのように、どのくらい描かれているのかを網羅的に抽出し、データベースを作成した。そしてこの作業のもと、本研究ではおもに日本住宅史上重要な要素の一つである付書院に着目し、日中における移入とその系譜について考察した。今後、この基礎的作業をもとに、建具の内容や変遷をめぐって当時の絵師たちがどのように理解していたのかについて、通時的・共時的あるいは年代記的・通史的に、地域やビルディングタイプの別を超えて検討することが可能になるだろう。